

件があったとは知らない小生等には不安感がない。ただ空港には異様に人影が少なかった。

テヘラン発、砂漠の波である。遙か彼方より一本道が延びている。オワンスがある。その廻りには、土造りの家や、畑もある。

そんな風景に見とれているうちに反対側の窓の彼方に日が落ちて行った。

カラチ着は夜であった。土産店で円が通用したので土産を数品買う。ロビーに猫をさがしたが居なかった。

バンコック着は真夜中であった。

十一月十二日 (月)

短い夜を過ぎて、成田に十時過ぎ着。蒸し暑い汗が出る、灼熱の国、イラクで出なかつた汗が滲む。

イラク、イラン搭乗客の多いこの便にはお土産品を買う客もないと思っているのか税関の検査は簡単であった。日本の税関吏も目が高いと、帰国一步は爽快であった。

大阪行きの三人を成田に残して、木戸君と二人で東京行きのバスに乗る。(終)

直川史談会のあゆみ (二)

直川村 小野 農 一

昭和50・8 「直川村郷土史佐藤甚兵衛特集号」発行(二十四頁)

昭和51・4 「直川史談」創刊号発行(十六頁)

内容 会長挨拶・榎牟礼城趾探訪之記・陸地峠探訪之記・薩摩琵琶曲譜「城山」・西南役こぼれ話・陸地峠山上詠歌・黒沢富尾神社神幸祭に詣でて・直川の民話(題字は山下会長の書)

昭和51・4・11 西南の役古戦場陸地峠の探訪と慰霊祭の執行

昭和51・6・7 横川岡の保食神社、仁田原内水の熊野神社の標の古木、大鶴の延命寺庵の仏像、古塔調査。

保食神社の標は四百年以上を経過し、胸高周囲五米六〇糎あり、熊野神社の標は胸高周囲四米七五糎あり、何れも天然記念物に指定すべき銘木である。

昭和51・6・8 県文化財調査委員入江英親先生を招いて「石造美術の種類と保護について」の講演会を行い、午後先生の指導を受けて、赤木地区の古塔調査を行う。

昭和51・6・21 文化財調査委員会を開き、村指定文化財の調査選定を行う。

昭和51・6・25 県主催の文化財巡回教室を開催する。

昭和51・7・1 「直川史談」第二号発行(十六頁)



栗林正明寺層塔

- 内容 津島畑山から尾高知へ・三国峠に登る・第一回ことぶき大学講座をうけて・肘切神社の由来・肘切神社七九〇年祭・由来城由来記・直川の民話。
- 昭和51・8・7 下直見地区に陰陽石が発見されたので、会員五名で調査する。その十米位上の竹藪の中に佐藤大庄屋が建立したと伝えられる金比羅様が鎮座していた。昭和51・10・6 次の八件十四基が直川村指定重要有形文化財に指定される。
1. 神内釈迦堂石幢(通称六地藏塔)後に具指定となる。銘文及び写真は前号七二頁参照)
 2. 神内釈迦堂石幢(通称笠地藏)吹原の笠地藏と共に、村内に二つしかない貴重なもの、室町時代の造立。
 3. 栗林正明寺跡層塔
村内最高の層塔で、七十七米塔身の銘は前号七二頁参照。
 4. 堂師浄光庵宝塔並宝篋印塔、宝塔は総高一、八二五米で村内最高のものである。宝篋印塔二基には墨書の銘記があり、その一基は「應永二十八年二月彼岸中」と読みとれる。
 5. 野々内天山源光寺跡五輪塔 鎌倉時代の作と言われ、造立そのまゝの姿である。
 6. 中津留観音庵宝篋印塔三基 造立そのまゝの姿で、内二基には銘文がある。(前号七三頁参照)
 7. 吹原石幢(笠地藏)並五輪塔 高貴の僧が、耳の病気を祈ったものと伝えられている。五輪塔には「応永四年」の墨書が読みとれる。石幢には次の銘記がある。
塔身前面「願主玄碓上座白」
塔身横 「明応五季甲戌二月彼岸中」
 8. 吹原神明山地蔵院層塔及宝篋印塔
平安・鎌倉の造立と言われ、宝篋印塔には「寿永」の銘がある。
昭和51・11・13 佐伯市で行われた第一回「大分県ふるさと祭り」で、直川史談会は表彰され、県知事より顕彰状並に賞金拾万円を受ける。
- 昭和51・12・1 「直川史談」第三号発行内容 直川史談会顕彰さる・肘切神社秋の祭典・孫左衛門と従是東佐伯領・鉄道開通・久保泊城跡に登る・亥子餅搗唄・竹の下供養塔・直川の民話。
- 昭和52・1・1 「直川史談」第四号発行内容 直川村姓氏考・沖の津留の柿の木・由来城実測図・水口遺跡探訪記・直川の方言・堂師坂・直川の民話。
- 昭和52・1・16 「堅田谷を行く研修」



直川史談

実施、羽柴先生に御案内をお願いし、中山峠・城村・長良貝塚・お為半蔵の墓・西野の惟治公の墓・石打の古塔・長瀬原の千人塚・市福所の潜電塔・黒沢の東光庵の桜・富尾神社・青山ダム等を見学、多田太郎吉さん方にて昼食をとり、青山の佐伯史談会員と懇談、大変有意義な研修であった。

昭和52・1・27 佐伯史談会特別会計より、斯道奨励の意味で金五万円也の助成を

受ける。

昭和52・3・16 村教育振興協議会（教育委員・小中学校教職員）直川史談会員と共に、一日村内古塔の見学を行う。

昭和52・3・24 「春の日向路史跡めぐりの旅」を実施。ことぶき大学を交えて美

々津までの沿線の史跡を見学する。和田越の戦跡―細島の妙国寺庭園―日知屋城跡―

仏舎利塔―美々津の立磐神社―日向民俗資料館―北川町可愛山陵伝説古墳―西郷隆盛宿陣の家―瀬口の御頭神社

昭和52・4・10 「直川史談」第五号発行

内容 西南戦争と北川町・日向路旅情・堅田郷見学所感・堅田郷史跡踏査之記・おとうさま由来記・直川郷土史物年表・緒方惟栄の遺跡を訪ねて・直川の民話

昭和52・5・7 赤木道ノ内惟治公主従の武具を祀る安藤家の「神の間」、石鎚神社下にある陰陽石、安藤式部の妻の墓石、細川内青柳の小野越前守を祀る古塔群の調査を行う。安藤家の「神の間」は修理し永く保存して行きたいものである。

昭和52・7・15 「直川史談神社編其の

一」を発行。この神社篇は、横川月形の故

小野登代彦氏が第四大区二十二小区（川原木・直見）の村社祠掌に在職中、後世永く伝承すべく十二社の「村社沿革誌」を編集したもので、これを「直川史談」三冊に

まとめる計画の第一冊目である。内容は内水熊野神社・神ノ原御嶽神社・竹の脇熊野神社・岡保食神社・井取天満神社。

昭和52・8・10 「直川史談」第六号発行。

内容 直川村姓氏考(二)・我が家の霧島・秋葉山の祭・水口部落今昔物語。

昭和52・11・4 梶ヶ原洞穴調査、梶ヶ原裏山頂上にあるこの洞穴は、深さ五米位で横穴が数本ある。古代人の住居跡にしては新しいようである。鉱山の試掘跡ではないかとも言われているが、古老も全く知らないと言う。洞穴のそばで石臼の片方が発見され、村資料室に保管されている。

昭和52・11・15 「直川史談神社編其の二」を発行

内容 梶ヶ原八幡神社・神内天満神社・楯原大歳神社・園肘切神社・岸上天満神社・青柳天満神社

昭和52・7・15 「直川史談神社編其の



郷土史料室

昭和52・11・15 「直川史談臨時号」発行

去る51・10・6付で村指定有形文化財として指定された八件十四基を紹介したものである。

昭和52・12・15 村指定文化財に標柱十三本設置。

昭和53・1・1 「直川史談」第七号発

行

内容 名馬池月・漢詩に偲ぶ西南の役・向船場の洞穴・水口部落今昔物語(続)・想故人晩年詩歌・内水の伝説・佐伯四国霊場八十八ヶ所詠歌・珍らしいお地藏様。

昭和53・1・9 子鹿ノ木の調査。横川後持の子鹿の木は、古老の口碑によれば、平家の落人が、本匠村より山を越えて、漸くここまでたどりついたが、精根尽きて最後を遂げたので、村人達が懇に葬り、その跡に植えた子鹿ノ木がこんなに大きくなつたと言う。一説には、持っていた杖をさしたところ、このように大きくなつたとも伝えられている。この木に触ったり、枝を折つたりすると、忽ち腹痛を起すと言われ恐れられている。この木は胸高の周り四米で九百年以上経過していると言われ、村内はもとより、県内でも類を見ない伝説をもつ貴重な文化財で、指定の上大切に保存したいものである。

昭和53・1・10 「女大学」複製発行(三十八頁)

昭和53・2・1 「直川史談神社編其の三」発行

内容 吹原富尾神社・月形鷗尾神社・大鶴

天満神社・水口天満神社

昭和53・3・1 「直川史談」第八号発行

内容 宮司安藤家の視察・霊山(まえがき)・霊山と物見山団蔵・徳川御三家諸侯の緑高。

昭和53・3・30 村教育委員会は直川史談会の要望に答えて村の文化財を紹介する八ミリ映画「美しきわがふるさと直川村」(上映時間三十五分)を完成。撮影は佐伯市河野正一氏。

昭和53・7 「長田良太郎歌集」発行(二十頁)

昭和53・9・23 「直川史談」第九号発行

内容 南九州バス旅行に参加して・天明後の米一俵価格表・子鹿ノ木様・内水の石鎚神社由来。

昭和54・3・7 下直見全域の文化財調査。調査ヶ所は次の通り。

岩尾崎の愛宕神社・間の洞穴・鉄砲鍛冶喜四郎屋敷・献上梨(殿様に献上した梨の木)・善利山護国庵(本尊毘沙門天佐伯四国第

四十九番札所)・新洞天満神社・大師庵

(土砂塚)・新洞観音庵(十一面観音、勢

至観音)・間の愛宕將軍延命地藏(椿三本

の内一本は胸高の周り一米四五糎)・江河

内の安穩山西禪寺(宝林山正禪寺末庵、本

尊阿弥陀如来、佐伯四国第五十番札所)・

石工平兵衛の墓(タカラク井手頭首工)・

西禅庵の手洗鉢(石)・専念寺の石垣(神

原甲斐庄屋石垣等に銘記あり)・霧島神社

(祭神可美葺牙彦命外八柱)・道越の天正

年間の墓石、供養塔・水口天満神社・佐藤

大庄屋跡・庄屋墓地・奉樹庵・薬師庵(み

な「水」口に唱えて仰ぐ薬師庵如来大師の

御作と聞くとの古歌がある)・芝原探題屋

敷跡と墓石。

昭和54・3・28 日出・杵築の研修旅行

昭和54・9・1 上直見芸能保存会によ

正面 明治十年

鹿兒島県土族肥後幸左エ門墓

右側 丑六月十九日

左側 享年三拾六歳

諱盛屋俗称幸左エ門

姓肥後民鹿兒島県土族

明治十年六月十九日

大分県於赤木村戦死

昭和55・2・26 村教育振興協議会によ

る文化財研修会実施。「直川の文化財」と

題した十五頁の資料を配布し、史談会員が

説明、文化財に対する関心を深める。

昭和55・3 村指定文化財の案内標柱を

設置)県道赤木吹原佐伯線の沿道に六本設

置する。

以上直川史談会のあゆみを列記したが、

貴重な文化財が多数あり、その保存に万全

次のような千人塚(塔身一・五九米)

が建てられていて、道の内の安藤家

(克己氏)が管理しているが、基礎

不十分なため倒壊の危険がある。

寛文三年

空風水地埵元岸法宗禪定門冥位

八月廿六日

天保十年明石秋室の作詩した「堂師

坂」の詩碑と、陸地峠に西南戦役の

碑を建立する計画の推進を図りたい。

(終)

十三重の塔

(説明板による)

この塔は基壇四面に二個づつの優雅な格狭間を持つ台座、四面に優麗な阿弥陀三尊仏が陽刻されている。初重軸部、そしてその上に四方仏を持ち、軒反はまことに優えんである。端正な安定感にあふれる層塔、中空高くそびえる相輪、この壮麗な姿は近隣に稀なる層塔として観賞されている。この層塔は形式から見て鎌倉期まで遡ると言われ、中世この地に拠っていた佐伯氏の造立であろうと推定

(55ページにつづく)